

700号に寄せて

第700号に寄せて、一編集委員の思い出すまに。

医報編集委員
(東区・紫南支部 鹿児島市医師会病院) 美園 俊明

鹿児島市医報が700号を迎えると言う事で原稿依頼が来た。驚きである。と言うのも、300号記念の編集討論会に編集委員として出席したことがあるから、突然の700という数字を見て本当に驚いたのである。

私は、昭和59年の医師会病院の開院から佐藤八郎院長、迫田晃郎副院長他数人の常勤医とともに赴任した。大学卒業11年目の6月であった。それとほぼ時を同じくして医報の編集委員になった。新しく開院した医師会病院からも情報発信源として誰か出せという程度の理由からであろう。退職が平成6年6月であるからちょうど10年間編集委員であった事になる。それ以降は大学病院医師会に入会となったので、市医報とも長いお別れであった。医報編集委員の一覧表を見ると編集委員としての私の背番号は27番である。その期間、担当理事は石塚元徳先生が4年、内宮禮一郎先生が6年で、その10年間服部行麗理事が副担当であった。市医報の創刊は、昭和37年島本保先生の時と聞いている。300号の時点で25年の歴史があった事になるが、700号は58～59年だろうか。300号の座談会のテーマは「医報、その軌跡と展望」であった。創成期の苦労話が特に印象的であった事が記憶に残っている。

さて、本原稿の依頼がきてから過去の自分の後記を2～3読み返して見ると、医師会病院の診療や経営の状態から果ては世相、政治、国際情勢に至るまでもつまみ食いして書いている。時代が反映されていると言う点においては不完全ながらも史料であろうが、なんとも文章力が稚拙である。投稿を会員向けに依頼したところ、これは載せられないという文

章があり、なぜ載せないのだとお叱りを受けたこともあった。そんなこともあり、編集委員として重要な義務は編集会議に出席して編集後記を書かねばならない事であるが、学術書であれ何であれ、月刊誌の編集後記など好んで読む人がいるものなのかと、ブツブツ言っでは書きながら当時の疑問であった。

当時、編集委員として26年間お務めになった永吉 浩先生、24年の内宮禮一郎先生、22年の水落ヤスエ先生がおられた。いつもその文章力もさることながらよく世間を、表も裏も知っていることには静かに聞き惚れていた。この位のベテランが揃うと編集作業の合間のちょっとした雑談が醍醐味である。口調も時に鋭くも、いたわる深みがある。水落先生は真砂町で開業されていたが、私の母と同じ年齢で、パイロットの免許を持ち、戦後朝日新聞社との入札に勝ち中古の飛行機まで所有していたとのこと。小倉空港からの帰り、鴨池空港の天候不良だったか燃料切れだったか忘れたが、斜めから滑走路に進入し肝を冷やしたなどの経験や紅白歌合戦の審査委員になった話など聞くに及び、こんな身近に想像を超えた迫力のある女性の先生がいたものだとは啞然としていた。「あんたも若いのだから、すぐパイロットの免許を取りに行きなさい」と言われ返す言葉もなかったことを覚えている。ここでもいい先輩たちに恵まれたことが後々医師会を觀る目が育ったと思っている。

編集後記を書くにあたり特に印象に残っている年がある。昭和62年の12月、その年は超電導フィーバー、エイズショック、利根川博士のノーベル賞があり、当医師会や医師会病



質もよく写真も綺麗だ。時代の波に乗り電子書籍化しないでほしいと思っているのは私だけかもしれないが、これからもこの医報が時代を映す鏡として大きな役割を担うであろうと確信している。現役の編集委員にエールを送りたいとともに、編集委員であったあの頃、大変お世話になった若き医報担当職員で何故か今でも若い現役の南 正一さんに改めてお礼を言いたい。

院関係では医報300号、佐藤院長の退職と迫田新院長の誕生、生島事務長から宮之原事務長、常勤医中村尚人先生と宗像修三先生の退職など話題の多い年であった。早々に編集後記も書き上げて余裕で忘年会に現を抜かしていたところ、まさにその時、久留市医師会会長の突然の訃報が飛び込んで来た。後記に一文追加をしたことを鮮明に覚えている。その3～4日前は清酒を抱いて医師会病院医局の忘年会で飲み交わしたばかりであったから、一同大きなショックであった。お酒をこよなく愛した小児科馬場泰光先生と今頃高い所で酌み交わしているだろうか、忘年会のツーショットが忘れられない思い出である。

今年は正月早々から新型コロナウイルスが話題を独占している。ちょうど1918～1920年のスペインインフルエンザを彷彿させるものがある。と言っても遠い歴史の話で衝撃が弱いのだが、当時は高々5,500万人の人口で約40万人以上の日本人が亡くなっているという。人工呼吸器や抗ウイルス剤などなかった時代のこと、そこはこの一世紀の医学の進歩を見せたいものである。時の経過とともに、どうもこの感染者の急増は先行きが怪しいのだが、本誌にこのウイルスの記事が花咲かないことを祈っている。

最後に、現在の当医師会報、厚く情報量も多く、学術も高度で充実していると思う。紙